

松波むかし語り ここに住み続けて

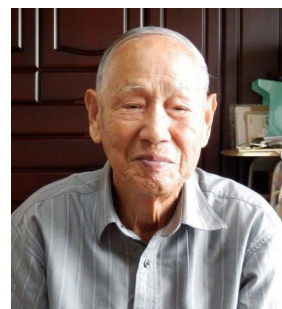
その 46

今回のお客様

県営住宅に古くから住む

はやし しげき
林 茂樹さん 88歳 県営住宅

“野菜が育つのはうれしい。それに、畑でつくった野菜を近くの甥や姪に配るのが楽しみでねえ！”



林さんが最初に松波(当時は松波町)に越してきたのは昭和 27 年、1 丁目の自宅から都内まで電車で通いました。木造駅舎がポツンと置かれていた西千葉駅を降りると狭い砂利道が続き、駅から 2~300 メートル先は一面畑が広がっていました。残業で遅くなると、暗がりからお巡りさんが懐中電灯で顔を照らし、行き先を聞かれたこともあったといいます。

「29 年に轟町に越しましたが、当時の松波町は活気のある街でしたね、商店もにぎやかだったです。畑はやがて 1 区画 50 坪に仕切られ、坪 1500 円で売り出されましたが、公務員の月給が 1 万円に届かない当時、1 区画 7 万 5000 円はとても高価でした」。

昭和 37 年に現在の県営住宅(県住)に入居した林さん、今はもっとも長く住み続けている世帯の一つになりました。「松波県住は県内でもっとも早く昭和 25 年から建てられ始めた県営住宅ですが、4 階建て 5 棟は、当時まだ鉄筋の建物が珍しかったのと、夜になるとブルーやピンクのカーテンがとてもきれいで周囲からうらやましがられていました。入居者にはお医者さんや国家公務員、県庁職員や中小企業の役員をしている方などのほかに、旧満州からの引揚者などもおられました」。集合住宅はあこがれの的であったのでしょうか。「そんなみなさんで初めての自治会をつくったんですが、役員である幹事は各階段の若い部屋から順番に選んだりしていました。「全員参加」ですね? 「それで問題なく運営されましたね」。林さんは平成 17 年、建て替えられた県住で最初の自治会長も務めました。



大正 14 年、現在の市原市の両親も兄弟も教師という一家に生まれた林さんは昭和 19 年に「電波兵」、つまり敵機の侵入を電波で探知する兵士に志願し、避難壕の天井が爆撃で吹き飛ばされるというすさまじい体験もしました。戦後は頼まれて中学校で電気関係を教えたりしましたが、その後、会社を興したり実用新案を 2 つ取るなど持前の電気の技術を生かして仕事をしてきました。

林さんとお話ししていると、“技術”を手に入れることに抵抗のない方だと感心させられます。78 歳でパソコンを習い、「帰ってくると、すぐわからないところをメモして」習得したり、現在もご自分で車を運転して高速道路を飛ばして通う先の畑では耕運機を動かすといいます。「畑に撒いた種が芽を出し、葉が伸びてくれるのがうれしくて。近くの姪や甥にできた野菜を配るのが楽しみで、みんなから 100 歳まで生きてくれと言われるんですよ」。林さんの顔がほころびました。